第１章　調査に至る経緯と経過

一般国道 431 号は、出雲市を起点として、松江市、鳥取県境港市を経て米子市に至る総延長 95.8㎞の道路であり、主として宍道湖・中海の北岸に沿って併走することから、地元では通称「湖北線」と呼称されている出雲部の大動脈である。一般国道 431 号東林木バイパスは、宍道湖・中海北岸の市町を連結する地域高規格道路「境港・出雲道路」の一部を構成する。現道の線形不良及び交通混雑の解消を目的とし、出雲市矢尾町から出雲市東林木町に至る延長 4.2㎞の４車線及び副道・歩道両側設置する計画であり、平成 10 年 12 月に地域高規格道路の整備計画に組み込まれた道路である。副道は、東林木町内において平成 16 年度より一部の供用が開始されている。

島根県教育委員会では、平成 11 年度に出雲土木建築事務所 (現：出雲県土整備事務所) から遺跡有無の照会を受け、平成 12 年３月に事業予定地内の分布調査を実施し、予定地内において青木遺跡、馬渡り遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の５遺跡を発見するとともに、遺跡の取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。その後、島根県土木部道路建設課及び出雲土木建築事務所との協議を経て、平成 12 年５月 22 日付出雲土木建築事務所長名で、文化財保護法第 57 条の３（現第 94 条）に基づいて、上記４遺跡地内における土木工事の通知が島根県教育委員会教育長に対して行われ、島根県教育委員会では同年５月 29 日付で工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。

上記の法的手続きに基づいて、島根県教育委員あ会は平成 13 ～ 15 年度に青木遺跡、平成 14 ～ 22 年度に山持遺跡、平成 23 年度には下澤遺跡の発掘調査を行った。このうち、本報告に関わる発掘調査は平成 18 年度及び 20 ～ 22 年度に実施している。

平成 18 年度は、４月 20 日付で島根県埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて文化財保護法第 99 条第１項にかかる発掘通知（以下、発掘通知）を提出した。通知上の調査期間は５月 15 日～ 12 月 26 日までで、調査担当者は島根県埋蔵文化財調査センター　原田敏照である。発掘調査は 12 月 22 日に終了し、平成 19 年１月 23 日に島根県土木部道路建設課長あて終了報告を提出した。

平成 20 年度は、４月 16 日付で島根県教育委員会教育長あて発掘通知を提出した。通知上の調査期間は５月 19 日～ 12 月 26 日までで、調査担当者は島根県埋蔵文化財調査センター　東山信治である。発掘調査は 12 月 10 日に終了し、平成 21 年１月 27 日に終了報告を提出した。

平成 21 年度は、４月 28 日付で島根県教育委員会教育長あて発掘通知を提出した。通知上の調査期間は５月 11 日～ 12 月 25 日までで、調査担当者は島根県埋蔵文化財調査センター　東山信治である。発掘調査は 11 月 25 日に終了し、12 月 24 日に終了報告を提出した。

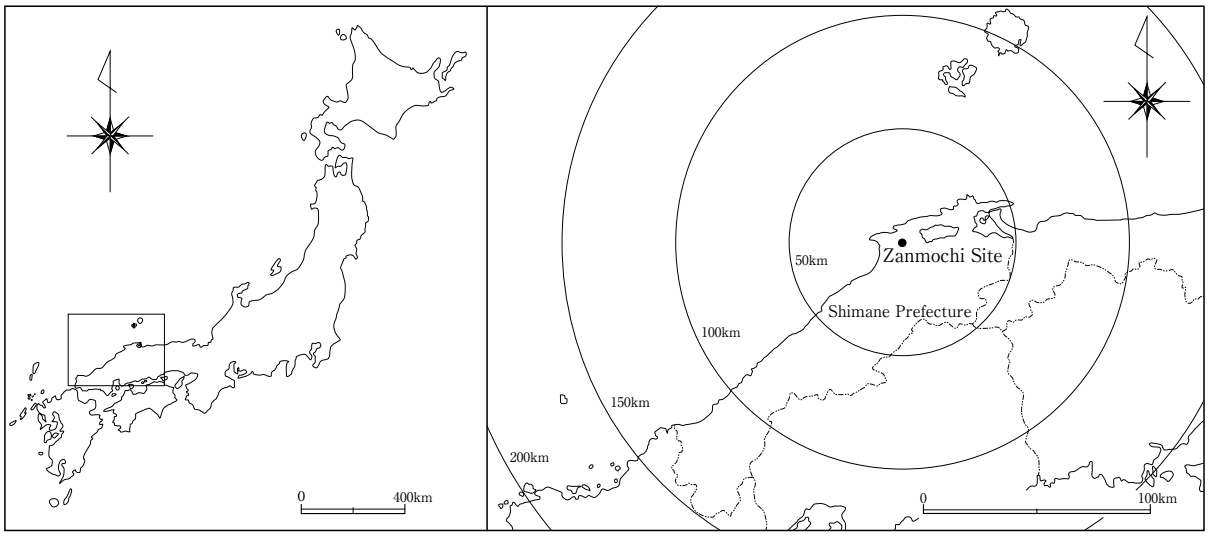
平成 22 年度は、４月 23 日付で島根県教育委員会教育長あて発掘通知を提出した。通知上の調査期間は５月 17 日～ 12 月 24 日までで、調査担当者は島根県埋蔵文化財調査センター　東山信治である。発掘調査は平成 23 年１月 24 日に終了し、３月２日に終了報告を提出している。なお、この調査をもって東林木バイパス建設に伴う山持遺跡の現地調査は全て終了した。

山持遺跡の現地は発掘調査終了後、道路建設工事が随時着手されており、平成 26 年３月に東林木バイパスの供用が開始される予定である。　（東山信治）

第２章　山持遺跡の位置と環境

山持遺跡は出雲平野の北端、出雲市西林木町・日下町・里方町にまたがり所在する。出雲平野は斐伊川･神戸川の二大河川により形成された沖積平野であり、南から北へ徐々に標高が低くなり、急峻な断層山脈である北山山系に至っている。すなわち、当遺跡の位置する北山東南麓は出雲平野で最も標高の低い場所の一つであり、斐伊川や北山山系から流れ出る中小河川の影響を不断に受け続けた地域であった。天平五年に編纂された『出雲国風土記』では当遺跡周辺は出雲郡伊努郷に相当する。『風土記』には、国引きを行った意美豆努命の子である赤衾伊努意保須美比古佐委氣能命の社が郷内にあることが郷名の由来として記載されている。赤衾伊努意保須美比古佐委氣能命は「意保須美」＝「大洲見」から沖積地守護の神と想定されており（加藤 1957）、当地が古来より水との戦いを強いられてきた地域であることを雄弁に物語る記述と言えよう。当地域周辺の遺跡の動向は、こうした出雲平野の形成過程と切り離して考えることはできない。以下、各時代の歴史的環境について若干ふれておく。

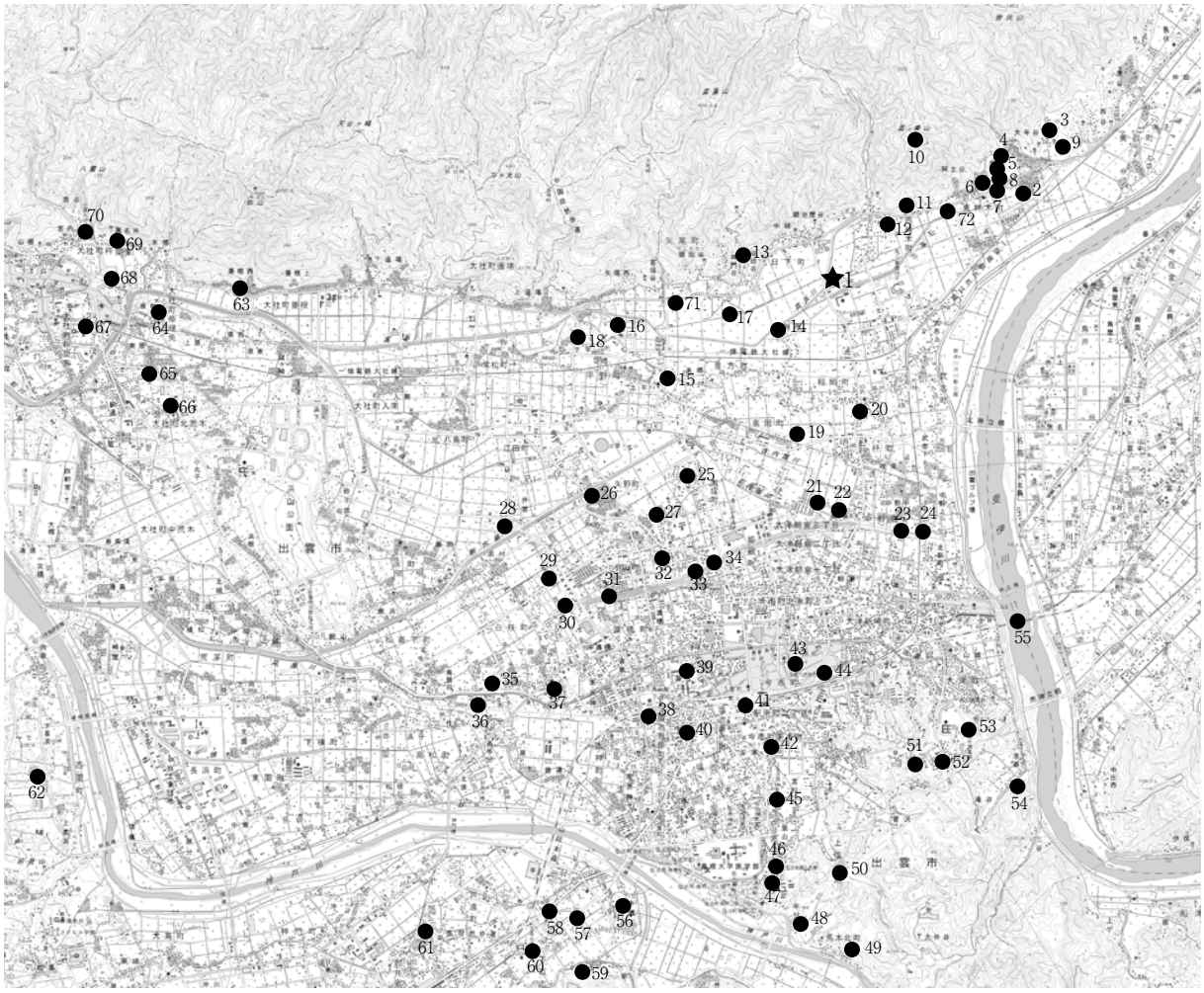
縄文時代　旧石器時代の遺跡は出雲平野西端の多伎町砂原遺跡において三瓶火山灰層に挟まれた土層中から石器と思われる石が出土し、日本最古の遺跡ではないかと注目されている。縄文時代早期になると菱根遺跡や上長浜貝塚などの遺跡が確認されるようになる。特に前者は当遺跡と同様な北山南麓に位置する遺跡であり、所謂「菱根式」と呼ばれる、当地域における早期末の繊維土器の標式遺跡として著名である。なお、繊維土器については山持遺跡６区からも出土している。縄文前･中期の遺跡は平野北半分ではこれまでのところ明確ではなかったが、６区包含層中から前･中期の土器が出土しており注目される。縄文時代後期では出雲平野中央部に位置する矢野遺跡では縄文後期後葉の福田ＫⅢ式・元住吉山Ⅱ式が採集されている（池田・足立 1987）。神戸川の上流域に位置する三瓶山は約 3600 ～ 3700 年前頃に第Ⅶ期活動期と呼ばれる活発な噴火活動があり、当該期にこの活動に伴う大量の噴出物が出雲平野に流出したと想定されており（角田 2004）、矢野遺跡でも当活動期の噴出物が確認されている（大西・徳岡・高安ほか 1989）。続く縄文時代晩期には矢野遺跡のほか、善行寺遺跡や蔵小路西遺跡から当該期の遺物が出土しており、蔵小路西遺跡からは突帯文期の火処が確認されている（島根県教育委員会 1999）。このように縄文時代



第１図　山持遺跡の位置

晩期までには出雲平野中央部までは確実に陸地化していたものと考えられる。山持遺跡の所在する北山南麓ではまだ確実な当該期の遺跡は確認されていないが、6区では各時期の縄文土器がある程度出土していることから、遺跡周辺部の北山南麓縁辺部等に遺跡が所在する可能性が考えられる。ただ、遺跡周辺の平野部では縄文晩期段階までは安定した陸地が形成されていた可能性は低いと推測される。

弥生時代　出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などがある。遺跡の性格が判明する事例は乏しいが、原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、



1 山持遺跡　2 青木遺跡　3 大寺古墳群　4 平林寺山古墳群　5 膳棚山古墳群　6 古前西北崖上横穴墓　7 古前背後横穴墓群　8 傘屋背後横穴墓群　9 大寺三蔵遺跡　10 鳶ヶ巣城跡　11 東組遺跡　12 龍善寺東遺跡　13 矢尾横穴墓群　14 里方別所遺跡　15 高浜Ⅰ遺跡　16 里方八石原遺跡　17 里方本郷遺跡　18 高浜Ⅱ遺跡　19 高岡遺跡　20 荻杼Ⅱ遺跡　21 中野西遺跡　22 中野美保遺跡　23 中野清水遺跡　24 大津町北遺跡　25 大塚遺跡　26 矢野遺跡　27 小山遺跡第3地点　28 井原遺跡　29 白枝荒神遺跡　30 小畑遺跡　31 渡橋沖遺跡　32 小山遺跡第1地点　33 蔵小路西遺跡　34 姫原西遺跡　35 白枝本郷遺跡　36 余小路遺跡　37 壱丁田遺跡　38 天神遺跡　39 海上遺跡　40 高西遺跡　41 藤ヶ森遺跡　42 角田遺跡　43 塚山古墳　44 大念寺古墳　45 上塩冶築山古墳　46 上塩冶地蔵山古墳　47 半分古墳　48 三田谷Ⅰ遺跡　49 光明寺古墳群　50 上塩冶横穴墓群　51 菅沢遺跡　52 長者原廃寺　53 西谷墳墓群　54 長廻遺跡　55 斐伊川鉄橋遺跡　56 古志本郷遺跡　57 田畑遺跡　58 下古志遺跡　59 妙蓮寺山古墳　60 宝塚古墳　61 知井宮多聞院遺跡　62 上長浜貝塚　63 菱根遺跡　64 原山遺跡　65 南原遺跡　66 中分貝塚　67 鹿蔵山遺跡　68 五反配遺跡　69 真名井神社銅戈出土地　70 出雲大社境内遺跡　71 下澤遺跡　72 門前遺跡

第2図　山持遺跡の位置と周辺の遺跡

出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される（村上・川原 1979）。これらの遺跡は、矢野遺跡を除けばいずれも平野縁辺部に立地する遺跡である。当遺跡周辺では、これまで青木遺跡や門前遺跡でわずかに当該期の土器片が若干確認されたのみであったが、山持遺跡 6 区ではある程度前期の土器も出土していることから、付近で集落が形成された可能性も考えられる状況になっている。当地域周辺で明確な遺跡が確認されるようになるのは弥生中期中葉段階であり、中期後葉以降に遺物が増加し、後期段階になって多量の遺物が確認されるようになる。山持遺跡では 1 区において中期中葉の土器が若干確認されているほか、３区でも中期後葉の土器が出土しており、この段階から不安定ながら集落が営まれつつあった状況を示している。出雲平野全体ではこの時期（弥生時代中期中葉）に爆発的に遺跡数が増加することが指摘されており（藤永 2005・米田 2006）、北山東南麓の集落の動向もこうした様相と軌を一にしたものと理解される。

出雲平野における弥生時代中期の集落としては、前述の遺跡のほか、天神遺跡、古志本郷遺跡、白枝荒神遺跡、中野美保遺跡、知井宮多門院遺跡などが比較的大規模なものとしてよく知られている。当該期の墳墓遺跡の様相は明確ではないが、中野美保遺跡では中期中葉に属する方形貼石墓が 1 基確認されており、後期以降当地で盛行する四隅突出墓の系譜を探る上で注目される（島根県教育委員会 2004a）。中期後葉段階まで遡ることが明らかとなった青木 4 号墓は、四隅突出墓の起源論に一石を投じるものであり（島根県教育委員会 2006a）、今後の議論の展開が期待されよう。また、遺物の面においても当該期では、古志本郷遺跡や下古志遺跡で須玖Ⅱ式壷が確認されており（島根県教育委員会 2006b）、荒神谷遺跡の銅矛、猪目洞窟遺跡のゴホウラ製貝輪とともにともに北部九州との交流を示す遺物として重要である。山持遺跡 3 区出土の勒島式土器や中野清水遺跡の鋳造鉄斧（島根県教育委員会 2004b）など、この段階において既に朝鮮半島系遺物が確認されており、幅広い交流が行われたことをうかがわせる。

弥生時代後期は中期後半から形成された集落の多くが継続して営まれ、かつ遺物量が格段に増加する。遺跡ごとに多少の差はあるものの、この傾向は後期を通じて一貫して認められるようであり、後期末から古墳時代前期前半にそのピークを迎える。他地域との交流を示すものとしては、楽浪土器や三韓土器といった朝鮮半島系遺物が山持遺跡などで見られるほか、北部九州系土器も前代に引き続き認められ、吉備系特殊土器及びその模倣品、西部瀬戸内系や近江系の土器も出土するなど、広汎かつ多様な地域間交流の様相を窺い知ることができる。青木遺跡では後期後葉以降の土壙墓から近畿式銅鐸の飾耳破片が出土しており、近畿との関係性を示すとともに、銅鐸の破砕行為や銅鐸破片の用途など様々な問題を提起している。墳墓遺跡では西谷丘陵で国内最大級の四隅突出墓群が営まれるほか（島根大学法文学部考古学研究室 1992）、平野部においても青木遺跡や中野美保遺跡などで中小規模の四隅突出型墳丘墓が営まれている状況が明らかとなり、墓制から見た出雲平野の地域社会構造へのアプローチが可能となりつつある。

古墳時代　こうした順調な発展を示していた出雲平野の地域社会が大きな変化を見せるのは古墳時代前期である。従来から指摘されているとおり（渡辺 1986）、当地域においては西谷 9 号墓に後続する前期前半の有力首長墓が現状では確認できない状況にある。9 号墓に隣接する 7 号墳は近年の確認調査で四隅を削り出す特異な構造が注目されたが（出雲市教育委員会 2006）、規模的には 9 号墓と比較すると遙かに見劣りし、かつ築造時期も出土土器から前期後葉まで降る可能性が高い。その他の前期古墳としては、山地古墳、大寺 1 号墳、浅柄Ⅱ古墳、権現山古墳などが知

られるが、詳細な時期が不明な権現山古墳を除き、いずれも前期後葉（集成編年３期以降）に降るものである。特に当遺跡の東２㎞に位置する大寺１号墳は出雲平野の前期古墳では唯一の前方後円墳であり、その場所も含め築造の背景が注目される（島根県古代文化センター 2005）。

一方、集落遺跡は、従来は古墳時代前期になると減少すると理解されていたが、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在し、墳墓の動向とは単純にはリンクしないようである。しかし、小谷式後半期には集落数が減少する傾向は認められるようであり、如何なる要因に基づくものか、その背景が注目される。

古墳時代中期も出雲平野の様相は今ひとつ不明確である。古墳としては平野南西部に奥才型木棺を備える小規模な方墳である間谷東１号墳、全長約 70 mの前方後円墳である北光寺古墳が営まれている。前者は奥才古墳群や全国的な棺内礫敷組合式箱形木棺の動向から中期初頭に位置づけられ（岩本 2003）、海浜部立地中小古墳の広域的地域間交渉を物語る者として重要である。後者は出土遺物や石棺残片から中期前半～中葉に編年され、同時期としては出雲部最大の古墳であり、その突発的な出現の背景は出雲平野の地域史を再構成する上で大きな課題として残されている（島根県古代文化センター 2007）。集落遺跡についても、九景川遺跡など、この時期から営まれる事例が幾つか認められる点は注意される。

古墳時代後期になると、大念寺古墳、上塩冶築山古墳など、全国的にも著名な巨石墳が相次いで築かれ、山代二子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている（渡邊 1986）。こうした巨石墳の背景には当然平野の開発の進展が想定されようが、今のところ当該期における大規模な集落は出雲平野では確認できず、生産遺跡の断片を知り得るのみである（島根県教育委員会 2006c）。こうした大型古墳の築造が停止されるのとほぼ軌を一にして平野南部の丘陵には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれる。当遺跡周辺では、金銅装馬具をはじめとする豊富な副葬品が一括出土した上島古墳（宮代 1997）、大型の横穴式石室を備える中村１号墳（平田市教育委員会 2004）、横穴式石室を主体部とする後期群集墳である定岡谷古墳群の存在が注目される。

古代　奈良時代の出雲平野は斐伊川を境に西の神門郡と東の出雲郡に二分される。近年の発掘調査の進展により、神門郡家は出雲市古志本郷遺跡（島根県教育委員会 2003）が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷遺跡（斐川町教育委員会 1996）が比定されているが、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、小山遺跡が官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。冒頭に述べたとおり、当遺跡は出雲郡伊努郷に所在するが、多量の墨書土器・木簡の出土した青木遺跡を出雲郡家の出先機関的機能が存在する場所と評価する見方もある（佐藤 2003）。当遺跡においても、6 区ではいくつかの墨書土器のほか、吉祥天や人物像を描いた板絵や木簡が出土し、注目されるところである。寺院跡では、古くから知られている神門寺境内廃寺、長者原廃寺のほか、青木遺跡の奈良時代Ⅰ区建物跡群を寺院跡とみる見方もある（内田 2006）。

中世　中世の遺跡としては、注目すべきものとして蔵小路西遺跡で検出された居館跡があげられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、出土した陶磁器類から 12 世紀後半から 15 世紀にかけてのもと考えられ、朝山氏または塩冶氏の居館である可能性が指摘されている（島根県教育委員会 1999）。また 15 ～ 16 世紀頃の居館跡と考えられる高浜Ⅰ遺跡からは、国内最古の将棋盤が出土している（島根県教育委員会 2011）。当遺跡周辺では、

青磁の優品を出土した荻杼古墓（近藤 1969）、多数の掘立柱建物跡、井戸が検出された青木遺跡があげられる。特に後者は皇室の荘園として九条家文書に記載のある林木荘との関連が注目される（島根県教育委員会 2004c）。当遺跡では、当該期の遺物は２区・３区の土石流層中より一定量出土していることから、その調査区の北側に当該期の集落・屋敷が所在していた可能性が高い。また、当遺跡のすぐ北に屹立する丘陵上には戦国時代に市内最大規模の山城である鳶ヶ巣城が築かれ、尼子氏復興戦の際には毛利氏による高瀬城攻略拠点となったことで著名である。

以上、北山東南麓を中心とした当遺跡周辺の歴史的環境を他の出雲平野地域と比較しつつ概観を試みたが、同じ出雲平野でも、南部域や中央部域とはやや歴史的展開が異なるようである。このことは冒頭に述べたような地理的な要因や郡境に接するという地政学的要因が大きく作用していたものと推測され、今後の調査・研究の進展によるその具体的解明が待たれる。　（伊藤　智）

参考文献

池田満雄・足立克己 1987「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」『島根考古学会誌』第 4 集

出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群－平成 14 ～ 16 年度発掘調査報告書－』

岩本　崇 2003「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第 3 号 大手前大学史学研究所

内田律雄 2006「出雲の神社遺構と神祇制度」『古代の信仰と社会』国士舘大学考古学会

大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己ほか 1989「出雲平野西部の形成過程」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究』島根大学山陰地域総合研究センター

角田徳幸 2004「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『島根考古学会誌』第 20・21 集

加藤義成 1957『出雲国風土記参究』今井書店

近藤　正 1969「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」『考古学雑誌』第 54 巻 3 号

佐藤　信 2004「出土文字資料が語るあたらしい古代史像」『出土文字資料が語る古代の出雲平野 平成 15 年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』島根県埋蔵文化財調査センター

島根県教育委員会 1999『蔵小路西遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 2』

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅴ 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅥ』

島根県教育委員会 2004a『中野美保遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 4』

島根県教育委員会 2004b『大津町北遺跡・中野清水遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 5』

島根県教育委員会 2004c『青木遺跡（中近世編）国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）建設予定地内発掘調査報告書 1』

島根県教育委員会 2004a『青木遺跡Ⅱ 国道 431 号道路改築事業（東林木バイパス）建設予定地内発掘調査報告書３』

島根県教育委員会 2006b「中野清水遺跡の調査」『中野清水遺跡 (3)・白枝本郷遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 7』

島根県教育委員会 2006c「白枝本郷遺跡の調査」『中野清水遺跡 (3)・白枝本郷遺跡 一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 7』

島根県教育委員会 2011『一般県道矢尾今市線地方道路交付金事業（大塚工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』

島根県古代文化センター 2005『大寺 1 号墳発掘調査報告』

島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』

島根大学法文学部考古学研究室 1992『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』

斐川町教育委員会 1996『後谷Ⅴ遺跡』出雲市教育委員会 2006

平田市教育委員会 2004『中村 1 号墳』

藤永照隆 2005「遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 182

宮代栄一 1997「島根県上島古墳の再検討」『島根考古学会誌』第 14 集

村上　勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第 2 冊

米田美江子 2006「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『島根考古学会誌』第 23 集

渡辺貞幸 1986「古代出雲の栄光と挫折」『王権の争奪』集英社

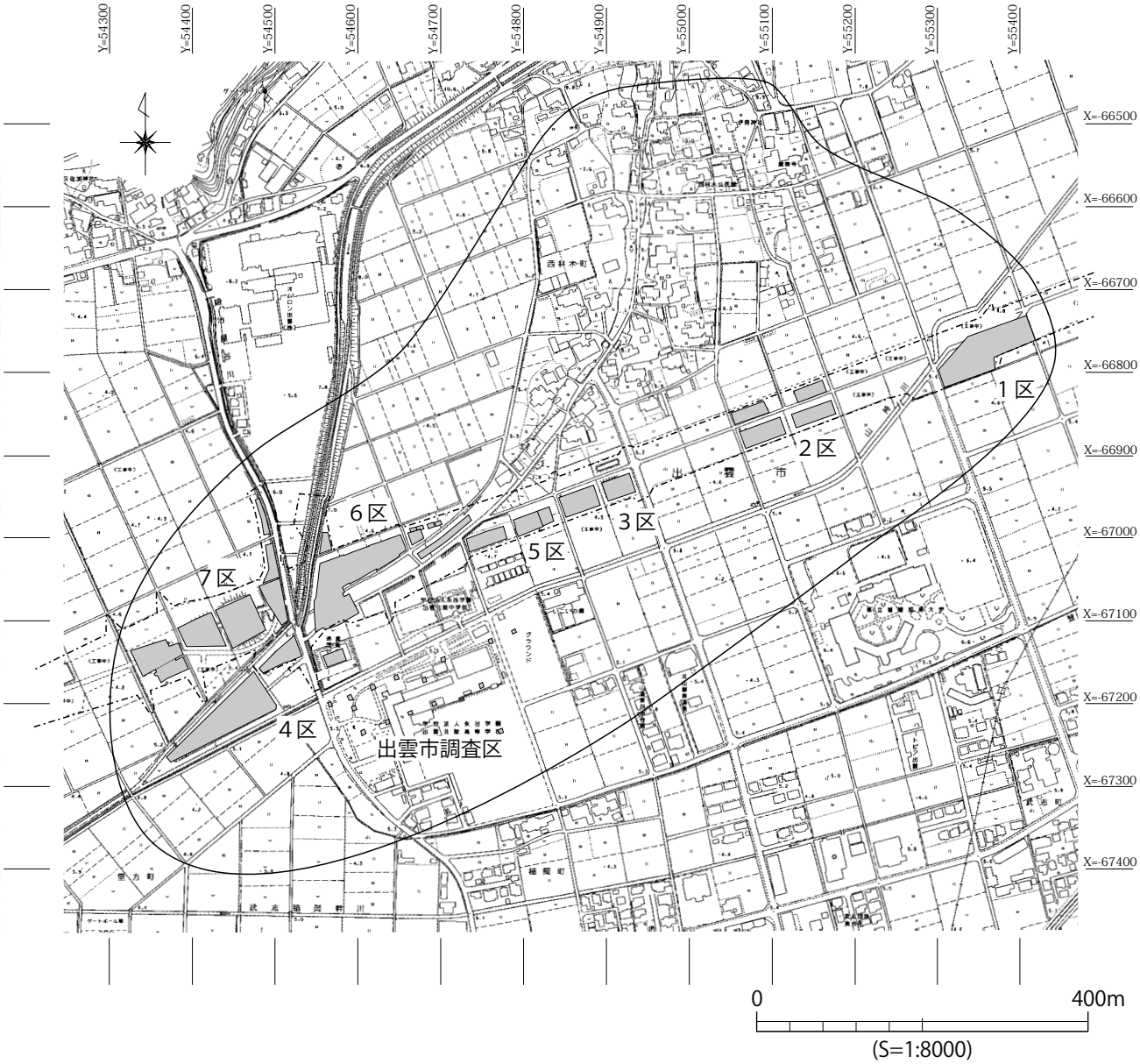
第３章　調査の経過と調査方法

第１節　調査の経過と概要

１．遺跡の名称について

山持遺跡は第１章で述べたとおり、平成 12 年度の分布調査によって発見され、北山山塊から流れ出て出雲平野北部を西へ流れる山持川に沿って、南北 500m、東西２㎞にわたる広大な遺跡群と想定された。さらに翌年度に実施した範囲確認調査においても、各トレンチから遺物が出土し、出雲平野でも有数の規模を持つ可能性が高まった。

ところが、分布調査終了後、当遺跡の範囲と名称を確定する際に、地元教育委員会である出雲市教育委員会との協議が十分に行われない等の錯誤があり、山持遺跡の範囲内に従来から周知の遺跡として知られている山持川川岸遺跡が包括される結果となった。既に山持遺跡の名称で文化財保護法上の手続きが終了し、報告書も刊行されていることから、本書においても同様の名称を用いることとする。



第３図　山持遺跡調査区配置図

２．過去の調査経過と概要

ここでは山持川川岸遺跡も山持遺跡に含め過去の調査経過を辿ってみたい。

①遺跡の発見（1962 年） 山持遺跡が最初に確認されたのは 1962 年の山持川河川改修時に新宮元栄氏により土器が採集されたのを端緒とする。採集された土器は 1 ～ 6 区で出土したものとほぼ同じ様相を示し、弥生時代中期末～古墳時代前期にほぼ限定される。

②第 1 次調査（1980 年） 1980 年には出雲女子高等学校（現出雲北陵高等学校）建設に伴い、出雲市教育委員会によって範囲確認調査が実施され、当遺跡に初めて調査のメスが入ることとなった。グリッドの調査のため遺構等の様相は不明だが、各グリッドから弥生時代後期前葉から古墳時代前期にかけての土器がまとまって出土している。層位的には、山持川を挟んで北側に隣接する第 2 次調査時の様相と良く似ているようである。この段階では、遺跡の中心は北側の伊努谷川扇状地上に立地し、後背湿地である当調査区周辺に意図的に投棄されたものと理解されていた。

③第 2 次調査（1994 年） 第 1 次調査区の山持川を挟んだすぐ対岸に汚水処理施設が建設されるのに先立ち、出雲市教育委員会により発掘調査が実施された。この調査で特筆すべき点は、その湿潤的環境から居住地ではなく捨て場と認識されていた当遺跡から明確な遺構が検出され、居住域そのものであることが明らかになった点である。竪穴住居にはやや不明な点があるが、掘立柱建物跡は柱穴出土の土器から確実に弥生時代終末期に位置づけられるものであり、当該箇所が主たる居住域であったことは疑いない。また、調査面積に対して遺物量が多く、搬入系遺物も確認されることから、規模的にも従来の想定よりかなり大規模な集落であったと想定され、当調査成果は従来の当遺跡の認識に大きな変更を迫る調査となった。

第 1 表　山持遺跡における発掘調査

調査原因	調査年度	調査主体	調査区	報告書（刊行年）
1 次：学校建設	1980 年度	出雲市教育委員会		「出雲・山持川川岸遺跡」『島根県埋蔵文化財報告書』第Ⅷ集（1981 年 3 月）
2 次：下水処理場建設	1994 年度	出雲市教育委員会		『山持川川岸遺跡』（1996 年 3 月）
3 次：道路建設（東林木バイパス）	2002 年度	島根県教育委員会	1 区	『山持遺跡（Vol.1)』（2005 年 3 月）
4 次：道路建設（東林木バイパス）	2003 年度	島根県教育委員会	2 区	『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区（Vol.2)』（2007 年 3 月）
5 次：道路建設（東林木バイパス）	2004 年度	島根県教育委員会	3 区 4 区① 7 区①	『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区（Vol.2)』（2007 年 3 月） 『山持遺跡Ⅳ区（Vol.3)』（2007 年 3 月） 『里方本郷遺跡・山持遺跡 4 』（2008 年 3 月）
6 次：道路建設（東林木バイパス）	2005 年度	島根県教育委員会	4 区① 5 区	『山持遺跡Ⅳ区（Vol.3)』（2007 年 3 月） 『里方本郷遺跡・山持遺跡 4 』（2008 年 3 月）
7 次：道路建設（東林木バイパス）	2006 年度	島根県教育委員会	5 区 6 区① 6 区②	『里方本郷遺跡・山持遺跡 4 』（2008 年 3 月） 『山持遺跡 Vol.5（6 区)』（2009 年 3 月） 本書（2012 年 3 月）
8 次：道路建設（東林木バイパス）	2007 年度	島根県教育委員会	6 区③ 6 区⑤	『山持遺跡 Vol.5（6 区)』（2009 年 3 月） 『山持遺跡 Vol.6（4,6,7 区)』（2010 年 3 月）
9 次：道路建設（東林木バイパス）	2008 年度	島根県教育委員会	4 区②，7 区②・③ 6 区④，7 区④	『山持遺跡 Vol.6（4,6,7 区)』（2010 年 3 月） 本書（2012 年 3 月）
10 次：道路建設（東林木バイパス）	2009 年度	島根県教育委員会	6 区⑦ 7 区⑤	『山持遺跡 Vol.7』（2011 年 3 月） 本書（2012 年 3 月）
11 次：道路建設（東林木バイパス）	2010 年度	島根県教育委員会	6 区⑥，7 区⑥	本書（2012 年 3 月）

④第３次調査（2002 年度） 平成 14 年度から島根県教育委員会によって東林木バイパス建設に伴う当遺跡の発掘調査が開始され、この年は遺跡東端にあたる看護短大北東部の１区約 4,300㎡が調査された。表土下約３ｍ下の湧水の著しい悪条件の中での調査であったが、自然河道中より弥生時代後期後半を中心とする大量の遺物が出土した。特筆すべきは吉備系の小型特殊器台・特殊壷が河道に一括投棄された状態で多量出土したことである。これらのうち吉備からの搬入品は破片１点であり、その他はすべて在地で製作された模倣品である。この特異な出土状況は特殊土器の使用法を考える上で注目すべき発見となった。また、旧河道中から木製品も多量に出土し、出雲地域における弥生時代後期の代表的な資料の一つとなっている。

⑤第４次調査（2003 年度） 平成 15 年度の調査は前年度の調査区の西側にあたる２区の 5,000㎡を対象に実施された。1 区と同様湧水と噴砂に悩まされたが、中・近世の水田跡や弥生時代後期の自然河道、しがらみ状遺構を検出し、当該期の良好な木製品資料を得ることができた。

⑥第５次調査（2004 年度） 平成 16 年度は２区の西側約 200 ｍの３区の 3,000㎡と遺跡の南西部分の４区 3,400㎡、さらに高浜川を挟んだ北側の７区 818㎡を対象に調査した。３区の調査では、中世・奈良時代・弥生時代後期の３つの遺構面を確認した。中世の遺構面では全国的に見ても大型の卒塔婆状木製品を、古代の遺構面では畠状遺構、道路状遺構等を検出した。弥生時代の遺構面では、自然河道からしがらみ状遺構を検出し、多量の弥生土器と共に朝鮮半島系無文土器の勒島式土器が出土した。4 区の調査では古代の畠の畝間溝群、古墳時代の土器群が確認された。7 区の調査では古墳時代中期の土坑や溝等を検出した。

⑦第６次調査（2005 年） 平成 17 年度は前年度に引き続き 4 区 3,400㎡及び 5 区 470㎡の調査を実施した。4 区では古代の畠もしくは水田跡のほか、古墳時代前期～中期の掘立柱建物跡、溝、井戸等を検出し、居住域本体が明らかになった点で大きな成果であった。遺物は大量の土師器や玉類などが出土した。5 区では弥生時代後期～古墳時代前期の自然河道を検出した。

⑧第７次調査（2006 年） 平成 18 年度は、6 区①・②と、前年から引き続いて 5 区の調査を実施した。6 区①の調査では古代の道路遺構と旧河道を検出し、大量の木製品のほか木簡や人物を描いた板絵が出土した。また弥生時代後期～古墳時代前期の土坑や土器群を検出したほか、斐伊川の堆積作用による砂礫層中から縄文時代早期～弥生時代後期の土器が出土した。5 区の調査では 3 区で検出された自然河道の続きや、弥生時代～古墳時代の土坑や土器溜まりが確認された。

⑨第８次調査（2007 年） 平成 19 年度の調査は、前年に調査した 6 区①の南側を 6 区③、西側を 6 区⑤として実施した。6 区③では 6 区①で確認された道路遺構の南側の続きを検出した。また、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑を多数検出した。6 区⑤では杭列を伴う盛土工法による道路遺構や多数の波板状凹凸面による道路状遺構が検出された。この成果によって、6 区①・③で確認されている道路遺構と併せ、古代の南北方向の道路遺構が多数集中する地点であることが判明した。また 6 区⑤では弥生時代後期～古墳時代前期の土器群や自然河道が検出された。

⑩第９次調査（2008 年） 平成 20 年度は、4 区②、6 区④・⑧、7 区②～④の調査を実施した。4 区②ではシルト層上面で弥生時代後期末の土器群を、6 区④では弥生時代後期末の竪穴建物状遺構や土坑等を検出した。7 区②では古代のものと考えられる幅２～３ｍの大畦を確認し、7 区③ではシルト層上面で古墳時代中期の溝や土師器や竹籠を廃棄した土坑が検出された。7 区④では古墳時代前期の溝や、弥生時代後期後葉～末の流路跡と護岸用とみられる杭列が確認された。

⑪第 10 次調査（2009 年）　平成 21 年度は、6 区①・③の南側に位置する 6 区⑦と、7 区③の西側に位置する 7 区⑤の調査を実施した。6 区⑦では、6 区①・③の道路遺構に連続するかたちで溝状遺構が確認され、道路構築時の整地に伴うものと考えられる。また、シルト層上面で弥生時代後期末の土器群と溝状遺構等が、下層の砂礫層ではほぼ完形の楽浪土器を含む弥生時代後期中葉以前の遺物が検出された。7 区⑤では古墳時代中期の溝や土坑、落ち込み状の地形を確認した。

⑫第 11 次調査（2010 年）　平成 22 年度は、6 区⑦の東側に位置する 6 区⑥、7 区⑤の西側に位置する 7 区⑥の調査を実施した。6 区⑥では弥生時代後期末頃の掘立柱建物跡 5 棟や溝、土坑などを検出した。建物跡の中には布掘の掘り方を持つもので、柱の下に礎盤を設けているものもあった。7 区⑥では古代の畦状遺構や、弥生時代後期中葉頃の自然河道などを検出している。

第 2 節　調査の方法

調査グリッドの設定　調査にあたり、6 区と 7 区のそれぞれに日本測地系の第Ⅲ座標系に基づき座標軸を合わせた 10 m四方のグリッドを設定した。詳細は各調査区の章に譲る。

表土掘削　調査予定地の現況は水田、宅地跡であり、表土の除去はバケットに平爪を装着したバックフォーを用いて実施した。掘削は、近世以降の水田層や造成土を対象に行ったが、一部の調査区ではその下の中世の黒色腐植土層（いわゆる「オモカス」層）についても実施している。

遺物包含層掘削・遺構の精査　遺物包含層及びそれ以下のシルト層・砂層については、主として鍬・スコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所は草削り・移植ゴテで掘り下げた。遺構検出では、遺構面を草削りで丁寧に削って精査したが、遺構覆土と基盤層との判別が難しい場合や、湧水等によって精査が容易ではない場合もあった。遺構の調査は、土層観察用のベルトを設定するか、遺構を半裁して埋土を掘削し、土層断面図を作成した。

記録の作成　遺構の平面図・土層図は、平成 18・21・22 年度はアイシン精機株式会社、キュービック株式会社の遺跡調査システム「遺構くん」を、平成 20 年度はコンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。一括性の高い土器群など有意な遺物出土状況は必要に応じて手測りで平面図・立面図の図化を行い、その他報告書掲載が見込まれる遺物は基本的に遺跡調査システムで出土位置を記録し、取り上げた。

遺構の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは 6 × 7 判フィルムによる撮影を行い、メモ・素図作成用、またはピット断面写真などは主として 35㎜フィルムカメラ (モノクロネガ・カラーポジフィルム) 及びデジタルカメラで撮影した。

整理作業・報告書作成　6 区②・④・⑥・⑧、及び 7 区④・⑤・⑥の本格的な整理作業は平成 23 年 4 月から実施した。調査員が遺物の実測等をしたうえで、報告書作成は DTP 方式で行った。遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工などは Adobe 社製 Illustrator CS4、Adobe 社製 Photoshop CS4 を用いた。遺構写真は、フィルムネガを焼きつけた写真をスキャニングしたデータや、デジタルカメラで撮影したデータに若干のコントラスト調整を行った後に EPS データ化し、遺物写真もデジタルカメラで撮影した後、遺構写真と同様の処理をしている。最終的な原稿執筆、編集作業は Adobe 社製 In Design CS4 を用いて行った。　（東山信治）